

(様式6-2)

## 研究成果概要

所属学校名 四日市市立常磐小学校  
職・名前 教諭 上田 幸枝

- 1 事業の名称 教育臨床内地留学
- 2 留学先の名称 三重大学
- 3 研究主題 学校現場から不登校を考える ― 子どもたちの心の居場所 ―
- 4 研究成果の概要

これまで不登校に関する様々な研究がおこなわれてきた。しかし、不登校は突然起こるものではない。日常生活の中に、必ず不登校のきっかけとなるような背景が存在しているはずである。本間(2000)は、欠席願望の抑制に「学校魅力」が大きく影響していることを示している。このことから、「登校回避感情」をもっていても、それを上回る魅力が学校に存在すれば、子どもたちは登校することができるのではないかと考えた。

本研究では、小学生の子どもたちの登校に対する意識を質問紙を用いて明らかにし、質問紙の結果と学校での子どもたちの姿を照合して、子どもたちの登校に何が影響しているのか考察した。そして、質問紙と児童観察の結果から、どうすれば子どもたちの登校意識が高まるのかを考え、不登校を予防する方法について検討を行った。

**研究1：**質問紙調査によって、「友だち」の存在が子どもたちの登校に大きく影響しているという結果を得た。そこで、因子分析で得た4因子のうち、最も得点が高かった下位尺度「友だち」の平均点を基準に、子どもたちを「友だち高群」と「友だち低群」に分類し、そのちがいについてt検定を行った。t検定の結果、「友だち高群」は内発的動機づけによって積極的に登校している可能性が高く、「友だち低群」は、登校に対する動機づけが弱いのではないかと考察した。

**研究2：**不適応傾向があると思われる児童を視点児とし、クラスの子どもたちとの「関係性」に注目して児童観察を行った。その結果、子どもたちの言動には、家族や友だち、教師からの「承認」が大きく影響していることがわかった。子どもたちは、相手から「承認」を得ることによって、受容されていると感じ、承認してくれる相手がいる場所では安心し、そこを「居場所」にすることができるのだと思われる。

また、内発的動機づけを高める3要因「自己決定(自律性)」「有能感」「関係性」(デン, 1980)の観点に基づいて、視点児の言動を考察したところ「友だち低群」と思われる児童は、どの要因も低い傾向があり、将来的に「友だち低群」に転じていく危険性があると考えた児童は、クラスの良い「関係性」によって、かろうじて学級の中で「居場所」を確保している状態であることがわかった。

これらの結果は、「友だち高群」と「友だち低群」の背景に「承認」の有無が関係していることを示している。つまり、「友だち」という登校意識には、学級における「承認」、すなわち、デンが提唱した「関係性」が大きく影響していると言うことができる。

**研究3：**子どもたちの「居場所」づくりについての検討をおこなった。まず、学級における子どもたちの「居場所」づくりとして、リレーション(関係性)をつくることを目的とするSGEの導入を提案した。また、学校以外の子どもたちの「居場所」づくりについては、フリースクール等の教育機関を訪問し、子どもたちの様子や担当者の話から、「個」を尊重した「関係性」の構築が子どもたちの「居場所」につながるということがわかった。

以上の研究結果から、登校に強い影響を与えている「友だち」という意識を高めるためには、子どもたちが安心して自己表現し合える「関係性」をつくることが大切であり、子どもたちは心地よい「関係性」が存在する場所を、自分の「居場所」としていることがわかった。これは、子どもたちの「居場所」が、目に見えない「関係性」の中に存在していることを示している。不登校を予防するためには、子どもたちが安心し、心を休めることができる「居場所」をつくることが重要だと考えられる。